ISSN 0913-0217　2026.1.1. 第1288号

発行人　北海道医師会長　松家　治道
編集人　情報広報部長　橋本　洋一

発行所　北海道医師会
〒060-8627 札幌市中央区大通西6丁目
TEL (011) 231-1432　FAX (011) 221-5070
URL http://www.hokkaido.med.or.jp/
E-mail info@office.hokkaido.med.or.jp　頒価 1部 275円(税込)

熊被害から見た社会構造の変化

情報広報部副部長　寺本（てらもと）　瑞絵（みずえ）

２０２５年の「今年の漢字」は『熊』であった。日本各地で熊の出没や被害が相次ぎ、その話題は連日のように報道された。かつては山中での遭遇が中心であった人身被害は、市街地や公園、スーパーマーケットへと場所を移し、人々の暮らしを脅かした。環境省の速報値では、２０２５年４～11月の人身被害者数２３０人、死亡者数13人と、いずれも過去最多である。市街地での緊急対応を可能にする制度整備が議論され、自衛隊が対策支援のため秋田県に派遣されるという異例の報道もあった。熊はまさに今年の社会を象徴する存在となったのである。

なぜ熊による被害がこれほど増えたのか。もちろん、熊が突然「凶暴化」したからではない。熊の個体数の急激な増加や分布域の拡大に加え、自然環境の変動と人間社会の構造的変化が重なった結果である。ドングリ不作などの餌不足や温暖化による活動期の変化が重なり、さらに人口減少・高齢化による里山管理の弱体化が被害を増幅した。放棄地や空き家の増加、藪化した山際、果樹・残渣・ゴミといった誘引物が点在する環境は、学習能力の高い熊にとって「効率のよい採餌場」となり、人慣れした個体の反復出没、いわゆる「アーバンベア」を生む。熊被害は環境行政だけで完結する問題ではなく、人口動態と土地利用の変化を含む社会構造の課題として捉える必要がある。

もともと人と熊は雑食性で、生態的ニッチ（食物資源）が重なり合う関係にあった。北海道の先住民族であるアイヌ民族は、ヒグマの生態理解に基づき、人間側の行為を律して被害を抑える一方、問題発生時には個体を特定して対処する危機管理の仕組みも備えてきた。そこには「制圧」ではなく「共生」を前提とした現実的な知恵がある。

２０２５年11月に「熊被害対策パッケージ」が改訂された。熊の個体数の管理だけではなく、人口減少と環境変化が背景にある以上、「予防原則」に基づく〝餌付けさせない〟対策が持続的な共生の鍵となろう。

さて、この現象を医療の目で見ると、熊被害は「社会構造の変化を反映した課題」であると見て取れる。環境や社会の変化に対し、野生動物が行動様式を変容させるという事実は、人間にとっても他人事ではない。実際、我々人間の身体もまた社会の変化に適応し、大きな変化を遂げつつある。産婦人科医としてその象徴を挙げるなら、現代女性における生涯月経回数の劇的な増加であろう。

戦前、日本人女性の生涯月経回数は多産と長期授乳により50～１００回程度であった。しかし現代は初経年齢の低年齢化、晩婚化と少子化による出産回数の減少、閉経年齢の延伸などを背景に、月経回数は４５０～４８０回へと増加した。生物学的変化をはるかに上回る速度で社会が変化し、わずか１００～１５０年ほどで月経回数は何倍にも増え、現代女性は人類史上かつてない回数の月経を経験するようになった。

月経回数の増加により、月経痛や月経前症候群（ＰＭＳ／ＰＭＤＤ）などの月経随伴症状にさらされる機会は増える。学業や就労の継続、スポーツ参加に影響する場面も少なくない。また、月経回数の増加は、子宮内膜症や子宮筋腫などの婦人科疾患の発症と密に関連する。にもかかわらず、〝生理〟は生理的なものとして我慢されやすく、受診や治療が遅れることも少なくない。医療者として痛感するのは、症状そのもの以上に、「我慢を前提とした社会」が負担を増幅しているという事実である。月経にまつわる不調は女性のＱＯＬを下げ、労働生産性にも影響する。経済産業省の試算では、月経困難症やＰＭＳによる労働損失は年間４９１１億円、女性特有の健康課題全体では年間約３・４兆円に上る。これは個人の努力や「我慢」の問題として委ねるべきではない。制度整備、学校教育による啓発、医療アクセスの向上、職場や家庭における理解と配慮、社会全体としての支援が必要である。また、月経随伴症状の治療には低用量ピルなどが有用であるものの、「月経を薬でコントロールするのは不自然だ」と抵抗感を抱く女性もいる。しかし誤解を恐れずに言うと、現代女性のように生涯で４５０回を超える月経を経験する状態自体が、人類の歴史・進化的には例外的なのである。社会構造が変化し、身体の負担が変わった以上、「起きにくくする仕組み」と「起きたときに支える仕組み」を、社会全体として持つべきであろう。

２０２６年の干支は丙午（ひのえうま）である。馬は前進と勢いの象徴とされる。熊被害が浮き彫りにした教訓―社会構造が変われば、自然も人の身体も変わり、対策もまた社会の構造として必要である―を胸に、本年は馬のごとく力強く、課題の先へと歩を進めたい。